



童修真書太閤記
三編
十

~13
459
30



待 13
459
30



重修真書太閤記三編卷之廿八

佐々木承禎長光寺の城を攻る事

并柴田勝家大勇防戦の事

江州小あふ処の織田家持城小籠る輩あるひは淺井の
勢と戦むあふひ蜂起の一揆又向ふ就中長光寺の
城小柴田權六勝家八百餘騎あて守り居たりけるを
責落さんらん佐々木承禎先敗の殘黨とあつめその
外郷民等と語らる五千餘人五月廿一日の早天又押寄
たり抑長光寺の城とやい平城ありて要害の頼むべき
方をたのむはまづ是を一舉小責落しその勢小乘



大月三編卷之廿八

和 西 鑿 石 乃 也

柴田勝家

して所々の城ともと落去あさしめんが爲と聞え
 たり承禎入道諸軍先たり下知しける此体の
 小城一川踏破るふ何の手段隙入るまで唯一時小乗
 入やと大勢と励し勇めりてしうぞ早逸切たる若
 者共我先よと進み城の惣構まで押詰無二無三
 責立たり城の大將柴田勝家元より聞えし勇將か
 り少しを屈せし足輕と勧め透間たり鉄炮を放ち
 弓を射させしあさし防ぎ勝家へ郎等たりける柴
 田源左衛門同新左衛門拜郷五左衛門井上久八中
 村與左衛門等とらめりて究竟の逞兵なるり
 三百餘騎城戸の内小窺ひ居寄手の色合と見り切て

出んと待掛たり佐々木の勢雲霞の如しと云共然
 を思慮淺く押詰稻麻竹葦の亂たるふ似し透た
 不処なけむる城中より放川矢玉大木大石より手
 足と損しを左右あし進み色めく處と見濟しす
 らや能時分を討拂つやと大音聲ふ呼り城戸
 を開き三百餘騎鑓をよきを作し群り立ち不敵
 の中へ面もあし突し出る中あし勝家自身好
 む處乃大十文字鑓を以て敵五六騎を突あし恰も
 無人處を行如し思ふ儘ふ馳廻り勇威と示し働け
 ら左あし鬼神の如くより更し面を向ん様もか
 し寄手多勢たるも元より郷民共のともを軍

令定まらば進退法あるを以て柴田一人は駈崩さ
右往左往と敗走を勝家軍の道は賢けしむる亂る
寄手と追討を以て静ふ兵を纏めし城に引返り承禎
入道大に怒り云甲斐ある郷民とも負軍し城
兵の威を付しこの悔しむる旗本を以て再を
寄んと憤あしける三雲新左衛門押留しける様
城兵少なき共恥ある侍必死の勇を振ふて籠りた
むる無体小敵し先今日諸卒を休息め明日
早天朝風涼し頃謀を以て責られ然るべしとそ
の方便を私語し承禎し怒り押えその日
乃軍の儲止まらし曉れ廿二日拂曉は再度惣軍ひ

押寄今日三雲指揮まらる佐々木乃
侍一千五百餘人と三手引しける五百人宛二手と左
右小伏を五百人と二の實しとるる遠く扣
えさせ昨日の如く郷民等も城を責らせける二千
餘人の者とも城近し押寄関を作り威をしめし今
日ある是非乗取んと勢猛く攻立けし城あてし昨
日の如く手で碎き粉骨を盡し防るるも寄手
の死傷夥しけしとも大勢あれし入替し攻めし
隊伍亂るし調のし既小敗走をんとあしける処に
見定めしやりの勇士五六十人突き出ず勝家櫓に
了これとる大に驚きしを思慮浅き者共のな

今日の軍へ討出^い利ありしに早々引入て持口
 と固めしと下知^しとせしとや敵の中へ突入し追
 撃する面白^しに耳^みのめけは是と救を返さんと
 て城兵三百騎と入り續^つく驀地^に駈出たり勝家弥
 氣とゆ^えたり斯^くも味方災ありて一纏^り引
 返^りしとて打^ち出^しる何を大将^は從^ひて敵を
 追ふ三雲新左衛門ありしと二の實乃五百餘騎と
 以^て柴田と迎^むて戦へ左右の伏兵一千餘騎混々と起
 立柴田跡と取切たりその隙^に寄手二千五百餘騎
 射^を共切共事とせし踏越^し責付城の總構一重と
 打破^り亂入と柴田敵を前後よりけ火水よりあつて

戦むけあり後^に敵起^りし惣構を破きたりと
 見えけしとぞ大^に驚^きし本丸と乗取^りて争^う人^は
 面^をと合^はせむと爰^に死^す命^をたむひ本丸^に入^りて討
 死^すんと夜^に又^も羅刹^の暴^をたる如^く大太刀の血^は染^りる
 系^を打拂^ひし弓手馬手^も切立^り馳^り廻^りる江州
 侍心計^は猛^ししとめて柴田を討留^んといふものな
 く散々^に切立^りし中^に開^けし通^りけし勝家得^え
 たりし一方^を打破^りしとや總構のうら^に駈入^り渦巻^り列
 佐々木勢と前後左右^に切散^り味方と纏^りめて
 難^しあ^り本丸へ走^り入^り城戸と固^めし支^える實^を
 天下^をめて鬼^としよふと偽^りし敵^{あり}しとあ^りて

感ト柴田今日の働と褒ぬものありしを
勝家本丸入と申す勢と見せし兩日の戦ふ或は
重手或は輕手負ぬものありし弥小勢とありしに
戦ひしに頼るる一勞兵といひ惣構の要害を
勝利よ力と得此勢とぬるは本丸と乗取んゆ
と多勢を入替く息ともられど責たりける事
を勝家少も屈せし諸士を勇めける抑士の二城と
預守するといふ命のつら敵をみせざる暫時あり
とも味あつたとい持味つてあつた死する事
我等う命のあらんとい城中へ敵とく一人あり

共入申す寄手幾万人ありし此頃の駈武者
者何れとのことを仕出はる敵を恐る士乃
道をおりへ千辛万苦とる味方の後攻を
あつたぞぞ万死と出く一生よあふといふ人
をいふとありしこれに當城に我り墓処なりあり
安養極樂の浄土也寄手へ慳貪邪見の鬼畜あり
そとらる爲み大切の浄土と奪とらるよと教訓
火水よあせと防戦は爰も寄手の輩この五六日晝
夜の分ちをわく責しつても城中更よあたる色
あくまあつた猛防くも結局寄手あらん疲
果てし炎暑の時節あり兵士多く病臥たり承

禎心とりのだく加様と手ぬるく振舞ふものありら
 此城急よ攻抜とらるるの一日數ありうらふ織田家
 の後誥を到着せしめての難あり如何と
 心問へ三雲新左衛門思慮とめらるし中けある朝倉淺
 井の両家信長と手切せしり聞えら此方より朝
 倉淺井と語らひむ彼等う勢を以て當國よあふ織
 田家の城々をせめさせらるる京都と美濃の通路
 と切し信長いふは猛將ありしを上洛せしと叶ふあり
 その内味方とせしやうよ京都へ攻入らるるを忽み本意で達
 即時小使者と小谷へ遣らし右の計を以て語らひし

何れ長政父子を誰り同心とる人やあはしと思ひしつら
 むもふ時とのひ六角へ當國累代の守護とのひ百姓
 までその恩と思ふとい能知たり究竟の味方也や
 悦ひ近代不快の中ありし中越を上の和睦ありて
 然るべしと評定一決し即合体の返事とあり越前へ
 使者をあらり義景あを一味ありむと勧め遣らし
 淺井父子へ一揆とめらるる織田家の持城とも責るを
 その身に江北の兵と發しやうの長濱と責落さん擬
 したりけり承禎入道ら淺井の一味を悦び早々當城
 と責破り味方乃勇氣と示さんとのと再度長光寺
 の城と圍く無二無三よ攻付しめし必死と極めし城

兵あり殊よこの一兩日休息して手負を療ふたれら
弥勇と増よつもの驚く氣とよを雨霰と鉄炮
とうち出寄手と漂る煙のよを吉田葛
卷の葦矢種とおよまほこ矢徹矢よ射ちよら
寄手よ手負死人多よつて乗入よつて思よつて
徒よ人力よの費よけり

長光寺寄手等水の手を取切事

并木下藤吉郎鯉江の城と乗取事

佐々木承禎大軍と以長光寺の城を攻惣構と乗
破本丸計よあひひ攻よ責けよどの柴田勝
家防戦の術と盡勇氣猛よあまひよら六角

勢責あぐの川の日々の炎熱よ犯よ寄手よ病者
多く甚難義よよ承禎大よ怒りよつてこの
小城よひ元此方の持城よ案内よ知川らんよ
責兼よの不思議よと罵よつて聞よ郷民
の中よ小賢よ奴進よつて訴よけよ當城中よ
井水よよ昔よ寛よ城外よ水を堰入よ
今よよらんあよこの水と切落よよ
ふよの即よその者よ案内者
よ切落よ六月暑氣の時よひ城中定め
て水よ渴よ難義あよよつて籠城の兵士快
く働よ得よよつて城中よ難

義の色あく常の如く防さけりこころ柴田
 籠城の如く此寛をりけり始終難義たふ
 べしと思ひころり井を二三ヶ処をせげり
 寛あててもさめ困窮せりけり然とも炎天と
 りの水多くり時あてり如何あくと危あむ
 せのものあつて勝家いさめ此井水晝夜は十
 四五斛涌出べり城中の兵士八百餘人あてり二分
 二分ふたつに随分大切小用をりそのうちあてり夕
 立もあてりあてり水をり寄手に見
 まへり下知り油断あく諸方の持口で見廻り
 けり寄手い定めり落城近きあてり味方の力

と費をり軍を止り伺ひ居たりこれとも城
 中弱るいりあく見たり承禎入道不思議あてり
 む平井神助といり使たり城中へ遣り勝
 家と對面し數日の籠城し弓箭の位を顯し
 無益し士卒の命を失ふるべり城を開きて退去
 あてり聊を狼藉たりて出立
 をけり勝家使者と迎へり對面し承禎入道乃口
 状をり悦び顔色あてり先以り御芳志の如と
 辱く去り斯籠城仕ふり勝家二心の如く
 を即從等あてり一致り墓処とおのひ定め
 くとたのむ能く壯者ともはる中聞を是り返

答中へ一但當城を去らるる味方の將士乃籠
一城々多くいへる夫等のおもふ處を恥ぢまゝ容
易く開城仕るへ一とも中まゝ一因うこそ等とを
語ひて後あし中けふを聞て平井神助何様と
もゆらんまらん御返答のおもむさ承禎小中べ一と
て座と立柴田小性小水と請けよ勝家小性大
盤臺小清水とありくと汲入二人してひき出し神
助小手水とひくを残り一水を椽の上より白洲へ
だぶくと投捨り神助あしと見り城中水之り
くぬ容子なり心得まふおもひあぐ大門のひき出
ゆる川見ると士卒とも炎暑不堪めぬとて門

内の廣庭へ水と十分打まきけふもど神助のいふ
不思議におもひ早々をさへ承禎へ柴田返答成
告り城中小水とふと澤山なりとひき出されハ叔
あし城のよけぬと理なきと承禎も案に相違
一然者外小城中と苦むつさ方便やある如何とせま
一と徒然と評議のさし日と暮れ此時織田家の持城
小籠ふ處の佐久間丹羽森中川稻葉の輩面々の居
城と守り居たりとゆる浅井の別心より一江州所
所一揆蜂起して晝夜日るを集り爰のこの砦寄
居又楯はるる城を攻め寄手を待と貝吹吹
鐘と鳴して騒動しけふより何と城と出り柴田と援

ひ得て手み汗と握りてのゝ居たりけるよ木下藤吉即
 ろろりへ長濱とて持つて日頃の仕置行届こ
 り小谷と八坂と接し二三里の際あり浅井の謀叛
 と少しもあつても浅井の一揆時として長濱領へ
 來るとありと更亂妨狼藉とをなすことあり
 藤吉即ち領内を戒め百姓の順次で立部
 伍を定め恩賞を重く譴責を軽く隨分用心嚴
 中付してや汝等領内を油断なく守るべしその際よ
 長光寺の柴田と援ふべし日頃の不快私事あり柴
 田城を落こしつる我君織田殿の御大事あり柴
 田某加勢と悦びとも何となくあれを余所よ見

て傍輩の好と棄つて長光寺落城を柴田必定
 討死とて去共援ふ時節もあつんと間者と付置
 その容子と伺ふこの水の手を取切るとつ
 の井水許と頼むと聞出の時をそあけと手
 勢とそらり打立けるか俄思案しけるを我と
 柴田の仇讐の如し我長光寺と援ふとあり勝家
 遺恨あつて深くあるべしさらば寄手の自と
 退散して柴田一人の力あり運を開き計るべ
 しと工夫しそとあり路を引違へ我領内の百姓二
 百余人と一揆の体に出立を六月三日の夜半の頃承禎
 入道のつとむむ神崎郡鯉江の城とて遣は此

者どもやうて鯨江に至り是は長光寺の柴田水の手と
 切落さる籠城難義及ふより人質を出して降
 参を請といへどもおこしつひ思召ありまつ當
 城に入置高瀬殿あり守護いささしはへの御詫
 ありり召連るひと呼らうり城の留守高瀬刑
 部門の上乃槽ありり事をさるふ實は郷民らもの一
 揆あり佐々木の印を付たはら少を疑は目出度
 りといひもあつは大手の門を開らて人質あり具
 たり一揆等二百餘人と城中へ引入柴田人質と請取
 んと用意ありり出迎ふ処と一揆の中は伏せられ
 木下侍らも太刀を抜き切ら廻ふ二百餘人の者

ともへ関の聲と揚竹鎗をもちとらけら城中
 以の外は周章し上と下へとひりめく処へ木下藤吉
 郎千餘人あり静々とお誥隊伍をさる攻入を
 城兵ありり狼狽しとらや敵みたりぬらぬら備
 と立り防げやそのもと城の本人鯨江相摸守打て出
 て下知ありり敵味方入らこれらは夜中のこと
 ありりいり事を敵何と味方と見定め難くありり
 不計ありりありり働くものも無りりありり秀
 吉下知しと逃るを逐さる心のまらに落しけるありり
 鯨江高瀬り兵大半落失らるありり百人ありり
 ありりありり此勢ありり大敵と取あらはと犬死せん

口惜一先落免も角をちるべしと思案一
城門の開きと幸と道を出し初ると今ハ城中ふ
支ふるもの一人もあゝ秀吉思のまゝに鯨江の城を乗
取けり

重修真書太閤記三編卷之廿八終

重修真書太閤記三編卷之廿九

勝家水桶を破り敵を破る事

并信長柴田と感状と與ふる事

木下藤吉郎奇計を以て鯨江の城を暫時に乘取
り六月三日の夜半也平井神助と長光寺の城へ使
とて來り三日の午の刻あり長光寺の柴田
勝家神助と返りし思案にて城中の兵士とあつめ
日頃水と汲り貯ふる水桶三石餘のりけるもの四ツ
五のありけるを一处に居たりて勝家中ける其の
も當城の主とて敵の中へ取籠らるる度々

切く出敵と追却け武士の道もたつとわとたた為た
ととと此程城中の掛樋を七落され士卒水も困窮
をころの乃井水をたのめても炎暑次第に烈
泉源固もら涌ると之斯くの氣力やうく衰へん
ぞ但大軍を引受くわくむらう能軍をくく某一人
の力も非に全く士卒を侍も殿の御恩を厚く思む
弓箭の道を汚さざると心よこめ一故ぞわくされ
此城も運を開らあは殿の御間にいと奉り恩賞
の地とやあそく功勞を謝せざると日頃らあひひ川
あふ今ハ水の手と取破らぬ惣構とい乗取も本丸を
あそいあうて援の味方もいゆゑ出來らぬ渴え死を

んりあつと城を開い敵も降あつと然とも織田
殿の御内もて柴田と呼と人あを知と身か何の
面目ありてら佐々木も降を請と方々も命を
わく生たうとも不義不忠の侍と笑くと臆病未
練の者ともと後指とされんを言甲斐なるあへ
但ととと人々の心よ任とべ一勝家一人へ思切たり
今宵敵の陣へ切入くあひあつた振舞ひ千子も
運ありて幸と敵を追散さは再び要害と修理
籠城一殿の出馬と待奉え一其事のあつた心
のゆゑ限り戦一足を引を討死と一我と同心
さる人く此水とおひあつと飲あく此水わく乃

大関記三編卷廿七

大階言三巻七十九
貯へい火矢を防さまらば不時の用意あり
しが今入用ならん貯へありと大音聲よ下知しけ
るといへるを宣ひしゆのうそ我々を左におひしも
のと誰の一人仰よ従らぬものいづら死にたか
らう忠義のため討死せし一門他門の面目を
何とて不義不忠の汚名とみむりて何國のそと
立忍びいづら潔く御供よ立り力あうせよ働さ
る言葉をいへる答へるを勝家大よ喜ひさ
しあゆみあつと吞あへるとゆるしけふあう何
水桶のそとえ立り柄杓を取汲出し心のゆ
りと飲てのち此勢よて切り出さしめたる天魔波旬

色おきうにたらびといふなら餘はあを馬よ
飼ふとあら心地のやとや打立をいへと勧ける
ふを勝家ふと打笑ひ面々水とい十分よのこ川系
やりもや水いりめぬうとあうを見廻さ何
も色をいへると答へし時勝家た今敵ふ打
向ふと切死よ死る身たうこの水桶も何うせんさ
らら打破きとて箍と切らあしとさう馬ふ打乗
馳出たり柴田何故箍を切らあしとさう馬ふ打乗
卒ふ必死を示さんあら斯せし叶ふあしと思ひ
付し故らるる寄手の陣あら晝の初と柴田か
言川系詞を誠と思ひ何様諸処ふ籠る処の尾張侍

大階言三巻七十九

と牒合返辭とんといむの今日明日の
 ふも隙明おのいもんや處々一揆蜂起とれ路
 次乃往來も容易のまふんと自ら許し
 かり侮れ用心もせ居たりけりよあり惣軍五千
 餘人が帯むろ解熟睡を一処へ勝家真先進
 て切て入いよと續一騎當千の若武者五百餘
 人関と作得物くと提四方八面ふ切廻ら何を
 敵何と味方とも見分のみ多々同士打たるゆめ
 あやうく柴田の勢ハ元より練練を遅兵といむ
 かつ思ひ切たる勇士等の死狂ふ狂ひまははその切
 先さるる勿々以て又向ふくもあはさるる寄

手五千餘人多しといふともその甲斐あり南より北
 へのけぬも西より東へ馳廻ると電光石火よりも猶
 くのやのり寄手遂はけあやうされ四度氣
 なる敗走の承禎入道大に怒りあはさるるの敵ふ
 かりとて破らるるやあふ踏止るる備と
 立待り開て真中ふ引包一人ものさるる打取やと大
 音よ下知まとも聞ぬありして逃たりけり承禎
 を大勢よ引立られおぼろび一引引たりしが三雲
 吉田水原田中の一族大將の左右ふ添く馬と立柴田
 を迎ふ柴田のりと見るあり大に悦びあの小勢より
 ておえし承禎入道とおぼゆるぞ敵も敵ふあそ

太閤記三編卷十七

ふは近江源氏の正嫡閻魔王への手とやけり討取や
といひもあえび真先と進め承禎入道のふと
と棄鞭うつし引退く柴田のふらひ中うと大手と
を後ちて追掛とら三雲新左衛門う弟同三郎左衛
門只一騎馬と引返し士卒とらげ中うあまむと小
勢の敵ふ斯見らるる追立らるるこの口惜さ一
人らう共返し合を柴田と取り引落し今追の取
と雪けゆ兵共近江源氏の名折は何とてわくは逃
たるどめとと味方とらさめ鎗とらとひく馳向
ら柴田こそと見くやさるる我手とめらんと
い殊勝ちう織田殿の御内よて鬼といとぬ柴田

権六郎あり冥途へ行く青黄赤白の鬼とめら責ら
とんあらるるよまの勝家う太刀風とらげくらとや
と呼らうらうらう鏑元とら血ふ染たる大太刀と振
あげ打てめら三雲三郎左衛門得らるとおあ
抜合を火華とららるる十餘合戦ひけふ柴田ら
聞ある大力らうと今日と限うと思ひ切く打太
刀と三雲三郎左衛門めら受らるる真向と
切割を眼ららんで働さ得と馬あり働と落ける
柴田う従者走寄起り立り首と取勝家猶も猛威
とあるひ十文結果と馳廻ると承禎入道の旗本の
終と味えび敗走ら三雲新左衛門吉田出雲守水原

隼人等あら残念やあはれなるの勢ふのけあやま
 さるるといふやある我より兵士とも馬の
 首を立並べ三方より唯一のめりあはれなる
 どを柴田の手者此もひる中勝家のしるる
 うてを負ねら例の大太刀を以て前後左右へ切あび
 け打あを當ふと幸よ雉立きるる三雲吉田兵猛
 といとも忽よ切破らるる今ハもや叶らるるといふ処へ
 鯨江の城よこのり木下藤吉郎よ追出さるるやう
 り迎來まら者承禎入道の前よ出る夜半のころ
 此御陣の御使といふ計らるる城戸を開き
 むら一揆原大勢亂入口今戦最中よひと注進は

承禎入道よと聞鯨江の城と乗取さるる長光寺
 を攻落してその詮ありしや爰と打棄鯨江へ
 引返一敵を追拂ひらるるひ押寄攻落さべりと下
 知しよと鯨江へ走向んととる処へ鯨江相摸守高
 瀬刑部散々よ打あさるる迎來あまらるる狼狽
 らの共乃曲あれいよと敵と見まらるる前後で取
 切よ叶ふまらと立さるるける能くられ味方
 たり如何あやくと問ら一揆とおひの外木下藤吉
 郎めみだるぬるもろも城と乗取さるる息あ
 續あへば語うけあまら承禎入道あさるる暫
 時ハ物もいさるるこの隙よ柴田へあひのゆら

切勝て首を取あと三百餘級勝鬨を揚ぐ長光寺の本丸さして引返はと眼前に見たう追はるる義勢もたのく旗と中さる煙とをさると石部とて逝たりしやと鯨江高瀬も跡も付行ともあに石部の城と心さる落しめらるる五千餘人と聞えし今いそつうは百四五十人よ過さうけうのち後長光寺の近処に敵といふもの一人をたふさるる柴田城中に兵士を集めおめしやの城を修理しそのうち軍兵等と呼集め夜討のうちよ討死とんとあひひし面への勇氣よあ寄手あひひの外よ敗北し十分の勝利を得し此城と

たび持固めしと偏ふ各の忠功とあふしこととものを根へ切解し捨たりし桶の箍ふりて一入面への志も定まりしどかさうとさるる危急の戦ふ切勝しと味方の運命たのめあう此上へ如何ある大軍よ寄るも恐るるに足は此事をやく注進をへしとて軍の次第并よ討取し大將分の首悉く岐阜へ送り實檢ふ入けあし信長大に感賞をらし柴田の勇烈今よ始めぬことあう今度の始末別して比類あり拔羣の勲功たうとて自筆の感状を賜らうあつさへ修理少進と改めらる柴田の使者よ不破彦三と添く長光寺の城へあつる柴田

この由と聞て城門の外まで出迎へ不破と本丸へ請
入けとら不破をふくも信長の仰をつつて感状を
つとつてその勝家とて請取頂戴して拜し
ふふ

今度於長光寺城佐木先敗北輩以大軍攻圍処雖
爲小势能盡防禦之術數日之籠城就中破水桶勵
士卒切崩大敵被守堅固奈似韓大元師背水智勇
之程絶感賞爲賞翫補任修理少進みゆ之猶不破
彦三てゆひあり

元龜元年六月七日 信長判
柴田修理少進殿

勝家ことと讀終て有難君思のふ末代も傳へ
勇士の眉目是り勝もふものあるはるる
なう々面々心と一川よふ一川のあふるるを皆一
同し頂戴をよめよとて五百餘人の侍ともよこれと拜
見ふと喜びけり然とも鯨江と木下う落とてゆき
のく手もゆと持あふると柴田夢もゆとらさ
ら

竹中重治樋口も降参を勸ふ事
并堀多羅尾樋口等織田家も屬する事
淺井備前守長政と佐々木承禎入道と和睦して越
前へ專使と馳急ら義景も出馬あふると早く佐々

大岡己三編卷士し

木と牒一合せ京都へ攻上るべしと遣しけり。朝倉の一族式部大輔景鏡と大将とて魚住備前守山崎長門守福岡石見守青蓮華右京亮溝口河内守とてめ歴々の勇士を相添三千餘人と淺井加勢とて差越けり。長政是ふ力を得て既よ打立んとあしけり。佐々木承禎入道柴田とて為ふ切崩さる。長光寺の陣を落し石部の城も引籠りあつた。餘江の城とて木下藤吉即ち乗取と織田方の中も勢猛くあつて長政の支度相違し攻登るる方便を失ふ。その上は信長近是定て當表へ出馬さへけり。防戦の用意をくへある

づりけり。所々の城も兵を引分てあし守らむ。美濃國境長久山菊安の城も越前勢と籠置今洲口長亭軒の城も堀次郎と籠置堀り後見とて樋口三郎兵衛兼益多羅尾右近と相添本郷の城も黒田長兵衛尉横山乃城を大切の所あり。大野木土佐守三田村左衛門尉秀俊野村肥後守直元同兵庫頭直次等と始とて江北第一といはるる兵士と擇り相守ら。長政居城小谷を四方より相救ひ。四方へ打て出後卷とて由と約束し。用心嚴敷敵の寄るを相待け

横山へ江州伊香郡小谷あり北東あり美濃國池田郡と堺を接せ長久山といふも江濃の堺江州伊香郡あり

朝倉式部大輔景鏡へ長久山菊安へ籠らんと手勢を引具へ小谷と出立しける魚住備前守を近付て先日信長敦賀表へ亂入し金ヶ崎おと心のあつし働さし時さしたる手柄もちて残念おのふ之今幸ふ美濃堺より打出し此儘通らんを言甲斐ありしや是より濃州へ働さ少く亂妨し手輕く引上べしとおのふいさしと申しけしと備前守尤可然と同心しけり然る進めと三千餘人濃

州へ打入六月十四日垂井赤坂邊を焼拂ひ大亂妨ありけし織田家の侍もささや浅井朝倉の勢押寄たるも足長働さし引取処と討へしと用意し待ける山崎魚住の馴たる老兵ありてあつしに深入り敗軍の基なりと引取しと翌日十五日長久山より引籠りし織田家の兵士等案不相違し手延し敵一人たも討取さりしとこの口惜さしと怒るしと詮方ありし信長めしと聞食しし江州表へ出馬しこの怨を復さしと陣觸ありける折節岡崎表より御加勢あること由りし勢ありし十七日信長岐阜に進

發あり然るも長濱の木下藤吉郎へ浅井り構
要害の中も前安長久山を味方の為難義の地
あるも信長出馬以前よまの是を落さんゆゆと
思ひつゝも軍兵を發しあぬと攻めは地理嶮岨
あして勿く多勢を進め難し何れも計畧と
以て落去るをめん竹中半兵衛重治を招き相
談しけるも重治聞て別も然るも謀計もなれど
とも彼兩城へ朝倉勢のあし浅井り兵一人も
あく他國もの加勢のため出張を命じらる命よ
あけく守るべしとおのふゆゆ一人も然る一た
ひ肝をむゆと勢たつへ自然と退去ししをせり

長亭軒の堀を味方よ引入るを朝倉勢さどりし
恐怖あまむ存の朝倉の勢本國へ引歸しなれど
二度出るもあるましくも儲堀と中へ遠江守り嫡
子あれともさしつゝ八歳をあるも何の思
慮りしつゝ次郎り後見の樋口三郎兵衛と申もの
重治懇意の好あり語らつゝ見やへ堀味方よ參
ふやとありて前安長久山へ我ゆゆのゆゆと申
ゆるゆゆり秀吉大悦ひ急る樋口と語らひゆゆを
ゆゆりゆゆも重治ゆゆゆゆりゆゆと申て從者ゆゆら
ふ二三人ゆゆ鎌の又も趣る樋口と對面をゆゆと
申入けゆゆ樋口ゆゆを聞ゆゆゆゆ竹中ゆゆ竹馬ゆ

ちりりしり 相馴れ 無二の中ありて今ハ敵味方
 と立ちしりたり 私の對面公私に付く憚りと返答し
 ければ重治城門近く打りて樋口殿に對面と請
 中と私の事よあはれ堀殿の御爲と存しと參り
 出城御難義ふゆり重治と城内へ入あへと中けり
 あり何さや城と出んも如何なり此方へ御入りと
 中て即門を開きしりしり重治只一人堀り城中入り
 樋口に對面しりしりしり今の堀殿に幼稚より
 中をいりりり御邊その後見しりり御坐を堀の家の
 繁昌の爲り抑りその家乃滅亡と祈りあふりりり左

ちあふりしりあり堀の家乃繁昌とおめひたりは
 をはやく信長一味同心ありあへ唯今滅亡とん
 とりり浅井小合体ありあふり共よ命を失ひ家
 と滅しふりり誰うら天晴忠臣とほむるそのあ
 りりりりりり堀の祖父能登守親父遠江守い
 川も浅井累代の家人といあよもありり一旦乃
 時勢ありりり旗下とありりり當時一同の風俗
 あり抑日本天照大神の御末百王一姓の神國よて
 ありしりり誰り王民よありりり然るふ浅井の
 朝倉も王威と恐りしり將軍と敬あへりり自身乃榮
 華ふりりりり國恩をおめりり是誠り國賊と中

べー國賊一味討死屍の上乃恥辱と受ん
 と然とハ口惜むるべーわれ後見たる人のとや
 のひあふべきとあつては我御邊と舊好あきを
 この事と告んため罷越川多あとも合點あり
 うむらゆるく考あへ長居互の為たの言棄
 立還んとは樋口あ由具と聽く大息川を我誤
 てりく足下の教示をうりては國賊一味の汚名乃
 下主從討死永く家名も斷絶とん速に御邊
 小從あへ王命を奉るべー待あつて多
 羅尾右近と呼出竹中り言川とこと有のまに
 語あつての多羅尾も異議なく同心共よ竹中

小打連木下の陣中へ推參降參の由やけふふ
 了木下大悦ひ織田殿の御前ハ秀吉あり取
 る一や一本領安堵相違あつてはと堅く約束
 してや降參の顯をいへつと方便と示
 合とささ返りけいことさう樋口多羅尾淺
 井ふをむく色とあつてささる

重修真書太閤記三編卷之廿九終

重修真書太閤記三編卷之三十

信長江州表發向小谷町家亂妨の事
并遠藤喜右衛門尉諫言愁歎の事
今頃口長亭軒鎌の又乃城主堀次即後見堀口三
郎兵衛尉多羅尾右近等竹中半兵衛尉よ説得をら
色淺井と叛る織田家合体の色を顯るるを木
下り言に違ふ所安長久山よ籠るる越前勢大
小驚る堀次即敵となりて此要害暫時も保ち
し何の詮ありと早く此処と引退る然るべしと

重修真書太閤記三編卷之三十

信長江州表發向小谷町家亂妨の事

并遠藤喜右衛門尉諫言愁歎の事

今頃口長亭軒鎌の又乃城主堀次即後見堀口三

郎兵衛尉多羅尾右近等竹中半兵衛尉よ説得をら

色淺井と叛る織田家合体の色を顯るるを木

下り言に違ふ所安長久山よ籠るる越前勢大

小驚る堀次即敵となりて此要害暫時も保ち

し何の詮ありと早く此処と引退る然るべしと

中もくそとぬよ魚住山崎真先よそんく落てゆく織
 田家あつち長亭軒の一城味方よ屬さるやいのち
 安長久の兩城まて退去しつと門出あり悦ひ
 その由岐阜へ注進ありあつち近江發向の路次開け
 出馬のたつりよと上下三方餘騎勇まはれさん
 て六月十七日岐阜の城と發しあひ翌日十八日近江
 國坂田郡柳田村西山村よ着陣ありあつち
 一書よ越前勢長久山前安と落ると六月八日の夜
 の内のことし又信長の陣觸六月十二日のこと
 ちつ江州小田村よ六月十八日到着ありとつち小
 田村とつちよ坂田郡よて西山より北よりて小谷よ

ちう

木下藤吉郎秀吉樋口三郎兵衛尉多羅尾右近兩人
 と召連信長の御陣へ參上し御目見と請奉りしに
 速よ召出さる神妙なりと仰出され本領相違ある
 へうさる由御書を賜らうけさる兩人安堵して御
 先よ立て御案内中へと言上り次よ竹中半兵衛尉
 とめし樋口と説き味方ありしとて抜群の手
 柄ありしとて太刀鎧馬たつと賜らうけしを重治面
 へさるて退出り次よ木下をめし出さる長濱と持
 固め百姓とつち静めしること一段神妙なるのとな
 らぬ鯨江の城と乘取佐々木承禎入道と石部一追

大野守三編卷廿
込しと格別の忠節なりその上此度堀次郎と味方
ふ付蒞安長久山の兩城中て退去せしめしこと凡智
の及ふ処ふあらば賞美あり多しとて秀吉平伏し
皆是君の高運よまうせつゝ敵の天よ背さし故まふ
秀吉功みひらばと言上せしむ信長あも弥おく
床しおわしめし然此勢を以て小谷へ押しを
一戦まへしと宣ひしとて秀吉いそく小谷の浅井居
城し要害ありとてなれし兵士も相應ふあり大
將長政あつとて壯者あり御出馬しとてたやを
御勝利覺束めし横山の城とこの頃よとてふ
普請せしとて城の大將大野木三田村あんと

左よその者あもひとぬ謀安しとてしこの此と責
落してのち小谷へ向しをまへしとて諫めしと
を信長いやくしとて小谷へ働しとてしとて聖十九
日手分を定めらば織田上野介信包丹羽五郎左衛
門尉長秀水野下野守信元等よ三千餘人を屬て堀
次郎と案内者とてし横山表と押置坂井右近森三
左衛門尉柴田修理進佐々内藏助前田又左衛門尉
市橋九郎左衛門尉佐藤六左衛門尉塚本小大膳以下
と引率しとて小谷の向ひなる柿御前山よ本陣と居
あひしとて長政願ふ処の幸のち速し馳向しとて一
戦と遂んとしとてしとて父下野守久政つとて制し

て味方あつちの小勢こせいちり信長のぶながら大軍おほいちりて越前えちぜん乃
朝倉あさくらも出勢いだしとてどどと両旗りょうきよて合戦あひせんとてと諫め
けりよふり長政ながまさも止とどとて得えと勝かつとて軍いさの圖ずとて
一いの信長のぶながあつち軍勢いさを引ひとて雲雀山うんせうざんへ
森もり三左衛門さんざゑもん尉ゑい坂井さかい右近みぎぢか齋藤さいとう新五郎しんごろう塙はな九郎くわ左衛門さゑもん
塚本づかもと小大膳こおほたん佐藤さとう六左衛門むさゑもん尉ゑい不破ふた河内かゐ守もり同彦どうひこ三
丸毛まるも兵庫頭ひんがづかづか同三郎どうざう兵衛尉べゑゑい八千餘人やちせんにんと向むかひひ尊勝そんしょう
寺表てらひらへへ柴田しばた修理進内しゆりしんない藤勝ふとう助林すけはやし新三郎しんざう福富ふくとみ平左
衛門等ゑもんら五千餘人よせんにんとささ向むかひひ同廿一日どうにじちつ此このをのとて
小谷こやの町まちへ亂入らんにゅう一い在家いけと放火はうか一い狼藉ろうせきをまとて
長政ながまさ父子ふしあつち返かへり音ねもと信長のぶながこれと見

かひあひい浅井あさい一塩付いっしんづけ一いと心こころ地ぢゆゆとてその夜よを
虎御前こらごぜん雲雀山うんせうざんへ宿陣しゆくぢんありて翌日あくるひ廿二日にじふにち小谷こやと引
拂はらひは龍りゆう鼻びへ陣替ぢんかへふ横山よこやまと責せまへと定めさだめめら
ふ浅井あさい方かたありて遠とほ藤喜ふとうき右衛門みぎゑもん尉ゑい長政ながまさ父子ふしと諫いさめ
けり信長のぶなが小谷こやの町家まちやと放火はうか一い狼藉ろうせきと味方あつち
一塩付いっしんづけんとのとて然さらら必當かならず処ところと
引拂ひきはらひは横山よこやまと向むかひひあつち信長のぶながと打取うちとり
て時節ときせつあつち今宵こんや急いそぎぎ御用ごよう意いありて明朝あした信
長の引拂ひきはらひは処ところと追討おひたしし仕つからら勝利しょうりと得えとて必定ひつじやう
あつちあゆゆにに久政ひさまさ更さらふと用もちひひ義景ぎけい也や
かか到着たうちやくありてこれと待まちり花はな敷敷軍いさとんと然

大内記

日

不^レア^レ此小勢^{このこせい}もく^レあの大軍^{たいぐん}と追掛^{おひかけ}んとおのひも
 め^レと一向^{ひさまら}に制^{せい}しけり^レも^レうて長政^{ながまさ}も怒^{いか}と押^{おさ}へ
 と止^{とど}ま^レい^レと^レ遠藤^{えんどう}喜右衛門尉^{きゑもんゑい}大の眼^{まなこ}に血^ちとと^レ
 る^レ昨今^{きのう}此方^{このうへ}も^レ軍^{いくさ}を仕^{つか}う^レけ^レら^レ信長^{のぶなが}大軍^{たいぐん}か
 る^レと^レの^レ長途^{ながと}を馳^せ來^きう^レ不^ふ知^ち案内^{あんない}の客兵^{きやくへい}之^の味方^{あじな}を
 案内^{あんない}知^したる^レ地士^{ぢし}も^レ主客^{しゆきやく}の勢^{せい}必勝^{ひつぱう}の地位^{ちゐい}あり^レと
 殘念^{ざんねん}の至^{いた}といひ^レて^レ明日^{あした}信長^{のぶなが}引拂^{ひきさら}ふ^レ敵^{てき}の氣^き十分^{じふぶん}ふ
 満^み心^{こころ}驕^{おご}り^レ川^{がは}へ^レ追掛^{おひかけ}る^レ戦^{たたか}ふ^レ勝^{かち}を^とい
 ふ^レとある^レは^レ横山^{よこやま}は向^{むか}ふ^レ敵^{てき}も^レ後^{あと}の戦^{たたか}と機遣^{きせん}
 づ^レ城責^{しろせき}め^レる^レは^レ是^{こゝ}を^とも^レ横山^{よこやま}へ^レ後^{あと}誥^ごする^レ
 を同^{どう}理^りあり^レ明日^{あした}敵^{てき}の引取^{ひきと}と少^{すく}も手^てさ^レを^とい^レ

敵^{てき}も^レ勢^{せい}川^{がは}へ^レ横山^{よこやま}の城^{しろ}を攻落^{せめお}さん^レと疑^{うた}ひ^レ
 彼城^{かのしろ}敵^{てき}は降^{くだ}ら^レ味方^{あじな}へ^レ一臂^{ひとひで}を断^たて^レ悲^{かな}あ^レ然^{しか}
 も伊香^{いかう}の郡^{ぐん}へ敵^{てき}の有^あり^レん^レ朝倉^{あさくら}の出馬^{いづま}を待^{まち}を^と
 と^レ義景^{よしかげ}の心臆^{こころおそ}して理^り暗^{くら}し^レ信長^{のぶなが}と對揚^{たいやう}を^と
 あ^レ良將^{りやうしやう}の下^{した}に弱兵^{じやくへい}あり^レ士^しは^と大將^{たいしやう}ふ^レ者^{もの}
 ら^レ越前^{えちぜん}勢^{せい}多^{おほ}く^レ共正^{きしやう}の役^{やく}に立^たち^レ大勢^{たいせい}な
 ら^レ何^{なに}も^レ如何^{いか}も朝倉^{あさくら}と存亡^{ぞんぼう}を共^{とも}に^レ
 せん思^{おも}召^めす^レも眼^め前^{まへ}に勝^{かち}へ^レ軍^{いくさ}を止^{とど}め^レ云^い甲斐^{かい}
 あ^レ人^{ひと}を頼^{たの}む^レとあ^レ口^{くち}惜^{おし}し^レ先代^{せんだい}
 ろ^レの義^ぎと思^{おも}召^めす^レ信長^{のぶなが}と手切^{てきり}して朝倉^{あさくら}を助^{たす}け^レ
 も始^{はじめ}終^{しま}助^{たす}け^レ難^{がた}い^レ今^{いま}乃^{すなは}様^{さま}

よりのことしては全く朝倉と共ともに斃な死なとこそあふのこ
よひ〜弓矢の道も武士の理ことを皆棄すてあふことの
浅猿あさまさ〜めと或あるは怒いり或あるは悲かなしく口説くちごとひ〜のこを
久政ひさまさらとも聞入きこいれと遠藤過言えんどうかごんあり〜して立腹たちはら終つつら
喜右衛門も為方たふなり〜つ己の役所おのえきよへ引退ひきひきさ斯ごとむら
と心と碎くださ辭ことと盡つく〜と諫いさむと〜を聞入きこいれふ〜ぬと
のこ〜後憂ごうさ〜何の道なにのちみちも君きみの〜めふ棄する命いのちへお
あ〜と某一人たれひとりなり〜とも信長と追掛おひか一塩付いちしほづら〜返かへ
報あやとゆつり不為な置おけり〜と躍あり上あ〜と憤いけ
ふが長政ちやうせいも父の命ちちのいのちの背そむら〜と遠藤えんどうり中な分ぶんと
聞入きこいれふ〜ぬい喜右衛門餘あまりの本意ほんいを〜ふ先手物さきでもの

頭の町野若狭守と呼出〜御邊明曉信長の當表退たうあひをたい
去の時何ともか様さまよて敵の後陣てきのごじんふ引添ひきそ〜山際やまぎはの
程ほどよ〜と見計みけいらひ鉄炮てつぱうと打うけ一當ひとああ〜と小
谷の町やのまちと十分じふぶんふ亂妨らんぼうを報當あやもせ〜退ひせん〜とあま
〜と〜云い甲斐かひ〜と私語さしご〜と元來もとより血氣ちいきの壯者さうしや
〜望のぞむ処ところの幸さいの〜と小躍こいど〜と悦よろこひひ〜馬うまふ秣ま
飼腹帶かひら〜と臆病神おそびやうかみの付つけ〜と輩たぐひの眠ねと〜とあま
と夜よの〜とあま〜と待まちた〜とけ
信長横山表へ陣替じんかの事
并佐々中条築田等後殿しんどうの事
虎御前山と信長の本陣ほんじんと〜軍勢ぐんせいと〜むけ小谷の

大開已三編卷七

六

町屋と放火させ狼藉あり猛威と示しあへとも浅井
勢出合さんれり十分よ塩付し心地して然らば横山表へ
出張をへしとせ廿二日の拂曉よ虎御前山を引拂む
龍う鼻へと陣替あり但信長軍よ思慮深き大將を
とべ此間浅井う出向ぬら必定謀のありてあるへし今
日引拂ふ時あを大事をなせしとせ佐々内藏助中条
将監築田左衛門三人よ後殿たるへしと定めしる尤
敵の懸り様も甚大切の退口ありし能く心して勤
けしと諭さんれりい三人悦み承り勇士の面目望む
処と式代して三人圍を取前後と定むるよ一番築
田左衛門二番佐々内藏助三番中条将監なり斯

て信長虎御前山を引拂ひあを段々小備へし一勢
打立をその次よ信長近習馬廻り二百餘り後陣
よ打後殿の輩よ力と合さんとあへしひけり柴
田勝家こそと諫め一千餘人と引率し信長で守護
し静々と引くゆく浅井う先手物頭町野若狭守
遠藤う詞よ従ひ官あり用意して打立織田方の勢
一勢引退くを見り若狭守り組の兵士五百餘騎をの
外多賀若宮の神人等と催し一千餘騎よ織田
の後殿へひしと食付支えしり一番よ築田左衛門
斯あを有んと覺悟をし上なれへ取り返り渡り
合火水ふりて戦ひけり町野若狭守ハ遠藤喜右

門カドう差サシ圖ヅマああり敵テキの後ノチ殿テン三さん手てよよらられれて見みて是こゝ
二に同どうふ打うちくく兼かねての計けい略りやくへ爰こゝありけりと諸しよ勢せうと
下げ知ちく熊くまと一旦いつたん颯さつと引ひ町まち野の川がわよりぬらら築や田たも追お
ひひ戴み番ばんへ佐さ々々内うち藏ざう助すけ入い替かりき後のち殿テンと勤とむ浅あ井いが
手てよりら千ち田てん新しん次じ即すなはち阿あ閉へい彦ひこ九く郎らう細こ部ぶ久く兵へい衛ゑ八は田た
助すけ七しち郎らう田でん邊へん久く六ろく中ちゆう嶋じま與よ七しち浅あ井い半はん助すけ三さん百ひやく餘よ騎きも
打うちてのち内うち藏ざう助すけ心こゝろ得えたりと居ゐ鋪いてああれと待まちひひ
信のぶ長ながの旗はた本もとより津つ田でん金かね左さ衛ゑ門もん生い駒こま八は右みぎ衛ゑ門もん平ひら野の甚しん右みぎ衛ゑ
門かど高たか木き左さ吉きち郎らう野の々々村むら主ぬし水みづ土つち肥こ助すけ次じ郎らう山やま田た半はん兵へい衛ゑ堀ほり
喜き三さん郎らうのちも成なり政せいふ力ちからと合あとんと引ひ返かへし真ま先さき
ふ進すすむ若わ狭さ守まも是こゝと見みる七しち百ひやく餘よ騎きと二ふた面めん小こ備びへ佐さ々々

が勢せうの横よこ合ありと童どうとああめいいと突つ搦なと無な二ふた無な三さん小こ駈か
立たちちと佐さ々々備び立たち足ありと追お立たちちはは既すでに危あやふく
見みへへいいるるよようう成なり政せい手てと下くだささでハは叶かふふややと小こ高たから
岡おかと楯たてふふとと佐さ々々藤ふじ左さ衛ゑ門もん小こ村むら市いち郎らう前まへ野の小こ兵へい衛ゑ
ななんんとといいふふ郎らう等らうと前まへに立たちち勝かつちここつつるる浅あ井いの勢せう
ふ向むかひ戦たたかむむけけるる成なり政せいの鎗やりと細こ部ぶ久く兵へい衛ゑううけ損そん一いつ
馬うまより真ま倒たふふ落おちちけるる処ところへ味あじ方かたより駈かけ來きるる武ぶ者しやと見み
て成なり政せい聲こゑううけけ此こゝ首くびとれれといいひひけるるふ彼あ武ぶ者しやあるる笑わら
ふて人ひとの突つ落おちちるる首くびははららひひ之のと云いふふ進すすむ行ゆ
浅あ井い方かたの阿あ閉へい彦ひこ九く郎らうと鎗やりと合あをを終つひに突つ勝かつ首くびと取と
らら上うて是こゝと見みるると大だい音おんふ呼よぶぶととよよくくらられ

大開已三編七

い土肥助次郎あり成政へぬ体よて某心のせくおられ
人違きし御邊の功とたふふと打笑ふ浅井方ふ
て々細部阿閉二人討死しつとらもささし一にひらま
は命と限うふ働けら成政う備崩しわけるを見て
三番中条将監とて成政ふ代と浅井と向ふ浅井方ふへ入
請取て中とて成政ふ代と浅井と向ふ浅井方ふへ入
替るへと勢もたふ勢れど土地案内なく知らん爰乃
森のこの林の陰う或へあらうと或へ陰と手稠追付是
非ふ信長の旗本へお誥無二の一戦とあると若狭守真
先よせめが相従ふ侍ともいつれも生て返らしと志と
一川よあしと一千餘騎潮の涌如くめと立けるふあり

中条も既あうとあべうりけると將監う一族ありけふ
中条又兵衛只一騎ふと止て浅井う勢の真中へ切て入
縦さす横さす十文字ふ切て廻る浅井勢多しととも
又兵衛一人ふ切立られ備おららふと見と千
田新次郎浅井半助中嶋與七八田助七郎田邊久六あま
は中と三方あり引包と責けら中条も重手輕
手数多処負う既と討るへうける處へ柴田修理進信
長の取て返し給ふんとあせり給ふと止め奉て我勢
と引分と馳來し中条大ふ力と得ふとあしと戦
ふたり然しと信長心をあし思ふと鉄炮の兵士五百
餘人と柴田う加勢ふさしと柴田中条ふと勢

なげく去ハ敵を打とめその間引取やと下知
しけるはより筒先を揃へ五百挺真黒は打た
るは浅井勢疵を蒙るものも少あらずはすは行先々
烟小隔くらと見へつらぬら連も勝へ軍ともふ
るは何方まで慕あつら早引上よと味方とよめ
備を固むると織田方とて取合を勝開あけて引
ゆへ若狭守の手討取し首のそ三百餘人あり味方
ハ細部阿閉二人の外雑兵二百餘人討とりのこたを
た先日の報答あつて織田勢は塩と付しと悦びお
あつて関を作つて引返をせめ浅井の面目とい
ひつて然るよ小谷の町野若狭守う休あし

とて久政は使を以て楚忽は軍して過仕出
まふと止らるる若狭守虚聞をて打立し
るは細部阿閉討死をてひとて小町野誤
とて久政以の外怒るあ軍令を破り罪は行
ふとて言ふあひひらと聞ぬらよて遠藤喜右
衛門尉も出長政に向ひ町野若狭守もぐりの勢
あて信長の後殿せり付三百餘人討取しと
は浅井家の弓箭前の光とてあつて是併君の御威
光あつて処して近頃手柄存し奉る御褒詞あり
て然る言とやける久政聞て町野何の功あらん
主の掟を破りあつて味方二人あて失ひしととの

罪尤大ありとて誅せんとん後々何と以て法令
 と立へんやとて若狭守小腹切とて怒りけるを
 近侍の面々いりて言ひ種々急状請ひて
 み久政とて和らそまのそのまにあり置とて
 ど遠藤喜右衛門愁涙とて天晴年ころころ町
 野ころ小勢とて以て信長の三万餘騎と追うけり三
 百餘人討たると老いころころ我々あれは加
 ころて追掛たらんよ信長と討てうけるをのそ
 ぞろろある長詮儀よの朝倉と待て大事の
 軍とてころころ味方の為よのぬ御計と
 存あり然とて此方の御勢の中は町野との侍

何れとていへるも上の御下知あると無念と
 押えり扣えりたると町野と御褒美あり
 此の氣も引立此のち味方の強ちあらんよの御
 勘當ありと心得とていふやげを長政とておも
 とたのろろ父久政の氣とて町野と引上りありか
 たり捨あうとてあつてり

一書あつての時信長と追掛佐々内藏助築田出羽
 守中条将監と軍とて阿閉彦六郎千田新次
 郎西野弥次郎上坂五郎礒野右衛門山田所之助
 雨森次左衛門細江久兵衛八田久七郎田邊久六
 とと始とて二百餘騎とて阿閉千田細江八

田田邊山田たろあべのりつともしあ〜と軍して敵多と
 討取其身も討死を〜とあり本書といふとの
 相違を猶後學の是正をよつ町野一本天野よ作
 と一本丁野よ作る

重修真書太閤記三編卷之卅終

嘉永六年癸丑新刻

三 都 書 林

三條通升屋町	出雲寺文次郎
心齋橋通北久太郎町	河内屋喜兵衛
同 博勞町	河内屋茂兵衛
同 筋本町角	河内屋藤兵衛
日本橋通二丁目	須原屋茂兵衛
同 二丁目	山城屋佐兵衛
同	小 城 屋 新 兵 衛
芝神明前	岡 田 屋 嘉 七
本石町十軒店	英 田 大 助
大傳馬町二丁目	丁 子 屋 平 兵 衛
横山町三丁目	和 泉 屋 金 右 衛 門
浅草茅町二丁目	須 原 屋 伊 八
筋違御門外旅籠町二丁目	紙 原 屋 徳 八

